

染織の

ふるさとを
訪ねて



清水とき
誌上きもの大学

26

清水とき

（学）清水学園理事長
専門学校清水とききものアカデミア学長
（財）日本きもの文化協会会長
清水とき記念きもの芸術館館長



藤布の里 京都府京丹後市へ

きものをいとおしみ、全国各地の染織に
熱いエールを送り続ける清水ときさん。

今回は、植物布の原点ともいえる、藤布の古法を
伝承しつつ創作活動をする小石原将夫さんを訪ね、
日本海を望む京丹後市網野町へ出掛けました。

撮影：宮川久 撮影協力：木の布工房「遊絲舎」

今回、清水ときさんは夏号にふさわしい織物を探して、京都府京丹後市網野町へ向かいました。丹後にはそれまで幻の原始布と思われていた「藤布」が伝承されていると知り、清水さんは感激。「藤の蔓から作られた布を、日本人は大昔から着て生きてきたのです。今でも、多くのきもの愛好家が藤布の帯に憧れをもっています」と、丹後藤布の歴史と製作工程の取材を楽しみにされました。

取り出したばかりの藤蔓を手に、小石原将夫さん(左)と清水ときさん(右)
石原さんは山に入り、藤布の材料となる藤の蔓をナタで採集します。藤には皮肌の赤いものと白いものがあります。藤蔓は他の木に巻き付きながら伸びて垂れ下がることもありますから、取り取る際に蔓の天地が分かるように印を付けます。天地を間違えるとそこから先の工程でうまく糸が取れません。清水さんの指先がその目印。清水さんの帯は石原さん作の藤布の袋なごや帯「自然な地風がいいですね。柔らかな色も気に入りました」と笑顔で

京丹後市網野町は、京都市内から日本海へ向けて特急でおよそ二時間半、丹後半島の根元に位置する古くからの織物の街です。藤布だけでなく、木綿到来以前には日本では、樹木や草などの植物から繊維を取り出し、原始的な機で織り上げ、衣服や生活用具を作っていました。今でも、さまざまな自然布がきものや帯に用いられて、愛好家の着こなしを彩っています。

蔓を木槌で叩き、
柔らかくします

取った蔓は工房に持ち帰り、乾
いうちに木槌で叩いて柔らかく
蔓の皮を剥きやすくします

2 根に近い部分(頭)に 印を付けておきます

藤蔓は高い枝から垂れ下がり、別の
枝に巻き付くなど、自由に伸びます。
伐採時、天地が分かるように目印を

1 山に入り藤蔓を 伐り出す「藤伐り」

藤は蔓性の植物。ほかの樹木にから
みながらどんどん伸びます。直径2、
3cmのものを扱いやすい長さで採取

藤蔓はしなやかですが、
伐るときは力がいられますよ



4 力をこそいで 中皮だけにします

(鬼皮)を取り除き、藤糸にす
皮(アラソ)だけにし、藤蔓5本
「頭」を揃えて結んでおきます

4 力を込めて「藤剥ぎ」 する清水さん

取材時にはいつも実体験を心掛ける
清水さんは、ここでは藤蔓の皮剥ぎ。
「これだけでも大変な力仕事ですね」



4~5時間煮て、 釜から取り出します

ぐら煮ているうちにアラソの木
は柔らかく溶け、くたっとして
す。火箸で釜から取り出します

8 薪を燃やし、 釜でぐらぐらと煮ます

かまどに薪を燃やし、大釜に8しば
のアラソを入れて、初め約2時間、
上下を返してさらに約2時間煮ます

7 束ねた中皮(アラソ)に 灰を摺り込みます

1しばに1升の灰を水で溶き、摺り
込みます。木灰の強いアルカリがア
ラソの木質部を溶かしてくれます

6 灰を水で溶き、 「灰汁炊き」の準備

藤蔓5本分で結んだアラソをさらに
5束合わせて1しばにしたものを、
水に浸けて柔らかくしておきます



3 ぬかを湯で溶き、アラソに「熨斗入れ」
ぬかをぬるま湯で溶き、川できれいに洗ったアラソをくぐらせると、繊維が柔らかく滑らかになります



12 こんなに白くなりました
灰汁炊きしたアラソをコウバシで丁寧にしごとと、煮溶けた木質部と不純物が流れ、白い繊維が現れます



11 灰汁で溶けた不純物を川で流します
近くの新庄川の清流で洗います。小石原さんの隣は奥様の朱美さん、奥は友人の吉岡さん。橋には清水さんが



10 この竹製の器具でアラソを洗う「藤こき」
「コウバシ」という竹製の器具。親指ほどの長さの篠竹2本にバネが付いてV字形。アラソを挟んで洗います



6 細く裂いたアラソを撚ってつなぎます
一に裂き揃えた2本の糸先をそれぞれ半分は裂き、重ねて同方向に撚り掛けひとつにして撚り戻します



15 「藤績み」する小石原さんの奥様・朱美さん
織物の種類に適した糸の太さにアラソを裂き、結び目を作らずに糸の両端を撚り合わせてつないでいます



14 ぬかで保護されたアラソを陰干しします
米ぬかの湯をくぐったアラソは陰干しされると滑らかになり、藤績み、手機織り工程で扱いやすくなります



これが藤布に生まれ変わります

表する織物として知られています。古く『万葉集』に「大君の塩焼く海人の藤衣」などと記され、藤の衣がその時代にはもう衣服として使われていたことが分かります。

小石原さんは、丹後の地で家業の織物業に励んでいた昭和五十五年、NHKのテレビ番組で、途絶えてしまったと思っていた藤織の技術がこの丹後に残っていることを知り、大変驚きました。それは丹後半島の山間部・宮津市上世屋。伝承していたのは光野タメさんや小川ツヤさんたち数名で、みんな七十代、八十代の大ベテランでした。小石原さんはすぐにそこを訪ね、藤織の技術のすべてを教えてほしくて日参することになりました。それからおよそ三十五年経ちました。小石原さんたちの働きかけもあり、技術の伝承と普及を目的に「丹後藤織り保存会」が発足し、その後京都府の無形民俗文化財の指定を受けました。さらに地域の活性化を目指す「丹後藤布振興会」も立ち上がり、京都府の伝統工芸品の指定も受け、両者の活動で技術保存の道が開かれるまでになりました。

清水さんは、すべての工程の取材に感動されましたが、特に「灰汁炊き」の工程では、その作業の厳しさに目を見張り「この作業があつてこそ藤布の風合いですね。大変なお仕事だということがよく分かりました。これからも皆さんに藤布を届けるために、頑張ってくださいね」と

表す織物として知られています。古く『万葉集』に「大君の塩焼く海人の藤衣」などと記され、藤の衣がその時代にはもう衣服として使われていたことが分かります。

20 帯が織り上がりました

左] 短冊柄を紋織で表した八寸なごや帯。経糸は藤の生葉で染めた絹糸、緯糸は藤糸を使用。[中] 藤糸と細い絹糸を用い、見えない裏側にも高級で上品な金糸が織り込まれています。[右] 菱柄を紋織にした凝った趣の帯



18 木枠に巻き返す「枠取り」

撚りを掛けた糸は木枠に巻き返し、充分乾燥させて整経。経糸は所定の

17 糸に甘く撚りを掛けて巻き取り

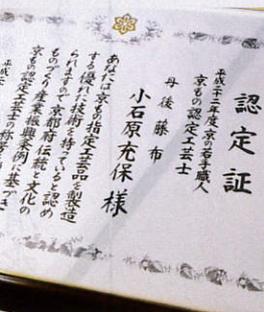
績んだ糸を湯に浸して柔らかくし、糸車で甘く撚りを掛けながら巻き取る「撚り掛け」で、糸は強くなります



撚りを掛けて糸を強くします

19 手機で織り上げます

八寸なごや帯を織っています。経糸200~300本を張り、緯糸は水で濡らし、柔らかくして打ち込みます



充保さんは京都府から「京もの認定工芸士」に認定された。充保さんは藤織の技術とともに地機織も、結城紬の織元で修業し、習得しました。京都府から写真のように認定証が授与されています



藤織みをする小石原家の後継者・充保さん

取材当日は遠方への出張で不在でしたが、充保さんはお父様の将夫さんから藤織の技術を受け継ぎ、日々研鑽を積んでいます



藤の花酵母を用いたお酒と藤布のコラボ商品

藤の花酵母を用いた日本酒と焼酎に藤布の衣を着せてコラボレーション。藤、お米、サツマイモなどの原料はすべて丹後の地元産で



藤布の能装束の前で海女の遺品資料取材

清水さんと小石原さんが手に持つのは、丹後の海女が海に潜るときに用いた藤布の袋。後ろに掛かるのは能楽「鶯飼」の鶯匠の装束

藤布工房「遊絲舎」通信
小石原さんは、藤布の歴史を「古事記」「万葉集」にたどり着くまで調べたり、観世流能楽師河村晴道師の指導のもと「鶯飼」の能装束の再現にも取り組むほか、地元・丹後の蔵元と藤の花酵母を使ったお酒作りにもかかわるなど広く活動しています。